

艦載機 J-15 は、結局不採用になるのか？

漢和防務評論 20181006(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

前稿に続き、中国の艦載機に関するニュースです。
J-15 を採用するかどうか、今年中には結論が出るのではないかと KDR は推測しています。
中国がウクライナから入手した艦載機の見本 T-10K-7 が欠陥機であったとロシアのスホーイ社の専門家が指摘しています。

KDR 東京特電：

2018 年 7 月、南華早報 (SOUTH CHINA MORNING POST (香港の英字誌)) は、中国軍の高級官員の話を用いて次のように報道した：J-15 は問題が多すぎるので、新たな艦載機を選択中である、と。本誌はこのニュースを信じる。なぜなら、以前から類似の話が中国海軍からすでに聞こえてきていたからである。このことは、J-15 が不採用の方向に向かうとともに、2 番目の空母には搭載されないということであろうか？真剣に観察する必要がある。この結末は、KDR 及びスホーイ社の専門家、あるいは SU-33 の設計者が最初から果敢に予測していたことである。KDR は、くどいようだが、何度も報道してきた。なぜか？中国軍の高級官員の話を用いた南華早報の記事は、J-15 が確かに”問題機”であることを指摘した。

僅かに 24 機にも満たない機数で、事故、死者が多すぎる。一旦作戦になると、戦闘力はひとまず置いて、必然的に戦闘以外で失う人員の数が多くなる。SU-33 はシリアにおける比較的緩やかな戦闘において 1 機失った。その後、SU-33 は全機シリアのロシア軍が駐屯する陸上基地に移動した。中国海軍は J-15 を歓迎していない。これは中国海軍内部では公然の秘密である。この点は、数年前から中国軍事代表団が第三国で某型艦載戦闘機を真剣に評価している動きを、KDR はすでに察していた。当該国の要求によりここで機種を明かすことはできない。この”秘密の戦闘機”は以前 KDR が報道したことがある。

一般の正常な考えを持つ人には信じられないことが起きている：米欧の艦載機はすでに F-35 という次世代艦載機に移行しつつある。たとえ複製するにしても、中国以外に 1980 年代の空母や艦載機を複製の対象にするだろうか？しかも概念全体は 1970 年代に形成されたものである。いかなる国家においても、複製したシステムを基礎に軍事工業を建設した国はない。当然、中国の敵対国家の立場からすれば、願ってもないことである。多くの資源を消耗するからである。見せかけだけの武器である。

なぜ J-15 は、問題機になったのか？その理由は、複製元の T-10K-7 が本来”問題機”だったからである。スホーイ社の専門家は当然知っている。したがってその後の K-8 型及び K-9 型は改修されている。どこに問題があったのか？

引き続き直面する新たな問題は：今後の中国空母は、2番目及び3番目以降の中国空母を含めて、どのような艦載機を使用するのか？KDRの推測では、面子文化や責任問題に波及するため、中国海軍のJ-15に対する姿勢は、今のところ曖昧な態度である。未だ最終決定を下していない。生産工場からは、検討の結果や保証書や決定書が次々に届いている。しかし現在のこのような状況の下では、堪えうるであろうか？

新たな艦載機の選定作業は、すでに開始された。迅速性を求めれば、当然ロシアのMIG-29Kである。しかしこの航空機は、後期の開発業務にインドの資金が入っており、インド海軍が最大のユーザーになっている。現在の露印関係はすでに冷却化している。一旦交渉に入ると、多くの技術的問題が発生する。また中国人は、MIG-29シリーズを使用した経験がない。

開発したばかりのFC-31ではどうか？現在2機試作しているが、どの国家も興味を示していない。KDRは以前に次のように説明した：国際市場では、双発の第五世代機に需要が有る。しかしFC-31の技術指標は、”帯に短し襷に長し”である。結局はたとえ輸出したとしても、JF-17と同じ運命をたどる（パキスタンは含まない）であろう。わずかな第三国が少数機を購入するだけである。投資した資金は回収できない。この航空機は、瀋陽航空機会社が自ら投資して開発したのである。

改めて二つの大設計局に新たな艦載機を設計させたのでは時間がかかる。或いは、以前あったJ-10戦闘機の艦載機化の案はどうか？これは改めて論証が必要になる。今年の年末には結論がでるかもしれない。

以上